

<特集：IFLA LRM 読解シリーズ>

## IFLA LRM 「第 3 章 利用者と利用者タスク」解説

今野創祐

### 1. はじめに

本稿は、IFLA Library Reference Model (IFLA LRM) <sup>1</sup>の第 3 章「利用者と利用者タスク」について、若干の解説を試みるものである。なお、IFLA LRM は邦訳<sup>2</sup>が出版されているため、日本語訳についてはそちらを参照する。その他の参考文献も、邦訳がある場合は、原則としてそちらを参照する。

この章で IFLA LRM は、5 つの一般的な利用者タスクとその定義を挙げているがそもそも（ここでの）タスクとはなんだろうか。例えば高久雅生は「タスク重要：ユーザタスク指向のプラットフォーム設計と開発を目指して」<sup>3</sup>という論文を発表しているが、ここでも高久は「タスク」という用語の定義については論文中で示していない。この用語の定義は自明なものとして記述を割愛したのであろうか。

このタスクという概念についても考察の余地はあると思うが、本稿ではひとまずその点についての深い議論は棚上げし、本誌の第 1 号で和中幹雄がタスクという用語について「利用者が行うタスク（作業、行動）」と記述した<sup>4</sup>ことに従い、タスクとは作業、行動であるとして理解することとする。

IFLA LRM は FRBR、FRAD、FRSAD を統合して作成された<sup>5</sup>。この旧 3 モデルと IFLA LRM との間の移行を容易にするため移行マッピングが作成され公開されている<sup>6</sup>。

利用者タスクの統合の過程については、既に和中が本誌第 1 号掲載の論考でまとめているが<sup>7</sup>、本稿ではより詳細にこの点について考察する。具体的には、旧 3 モデルと IFLA LRM の利用者タスクを見比べ、移行マッピングを参考にその過程を分析する。

### 2. FRBR、FRAD、FRSAD、IFLA LRM の利用者タスク

まず、FRBR の利用者タスクは「発見」「識別」「選択」「入手」である<sup>8</sup>。

FRAD の利用者タスクは「発見」「識別」「関連の明確化」「根拠の提供」である<sup>9</sup>。

FRSAD の利用者タスクは「発見」「識別」「選択」「探索」である<sup>10</sup>。

IFLA LRM の利用者タスクは「発見」「識別」「選択」「入手」「探索」である<sup>11</sup>。

以上よりまとめると以下の表 1 となる。

表 1 旧 3 モデルと IFLA LRM の利用者タスク

	発見	識別	選択	入手	探索	関連の 明確化	根拠の 提供
FRBR	○	○	○	○			
FRAD	○	○				○	○

FRSAD	○	○	○		○		
IFLA LRM	○	○	○	○	○		

### 3. 移行マッピングから見えてくるもの

移行マッピング<sup>1,2</sup>において、利用者タスクについて説明されている箇所は存在する。P.2の「Overview of differences between IFLA LRM and the FRBR-FRAD-FRSAD models 1. User Tasks」がそれである。この記述を読む限りでは、以下の考え方が読み取れる。以下、箇条書きで記述する。

- ・FRADはFRBR、FRSAD、IFLA LRMと違って、図書館員の情報要求と（それ以外の）エンドユーザの情報要求を異なるものととらえている点で異なるものであった（ため、利用者タスクもやや異なるものとなった）。

- ・IFLA LRMの初めの4つのタスクはFRBRのタスクの一般化である。「発見」と「識別」はFRADとFRSADのタスクの一般化でもある。「選択」はFRSADのタスクを含むように一般化した。「探索」はFRSADのタスクから引き出されたけれども、IFLA LRMでは、FRADのタスク「関連の明確化」から引き出された側面を含むように定義されている。FRADのタスク「関連の明確化」の他の側面はIFLA LRMの範囲外と考えられた。FRADの最後のタスク「根拠の提供」は図書館員の仕事に関連したタスクなのでIFLA LRMの範囲外となる。

前者に関して言えば、そもそもFRADは典拠データの構造の概念モデル化を目指したものであった以上、このような考え方が生まれることは当然であると思える。

一方で、後者に関して言えば、では、FRADのタスク「関連の明確化」のうちどの側面がIFLA LRMの「探索」に入ってどの側面が入らなかったのかが移行マッピングの記述を読む限りにおいては明確ではない。これら各モデルにおける、各タスクの定義を読み比べることは考えるヒントとなるだろうが、そうした作業を行ってもなお、明確ではないと言える。

また、単に筆者の勉強不足かもしれないが、そもそもこれらのタスクはどのような理論的背景を基に議論され、決定されてきたのか、その成立過程も、少なくとも一般的には明示されていないように思える。

今後、このあたりのテーマについて、理論的な研究が進展することを期待したい。

なお、本稿は、日本図書館研究会情報組織化研究グループ主催で2020年8月22日に行われた、『IFLA 図書館参照モデル』輪読会第2回における筆者の発表および配布資料を基にしたものである。

<sup>1</sup> IFLA Library Reference Model, 2017 <[https://www.ifla.org/wp-content/uploads/2019/05/assets/cataloguing/frbr-lrm/ifla-lrm-august-2017\\_rev201712.pdf](https://www.ifla.org/wp-content/uploads/2019/05/assets/cataloguing/frbr-lrm/ifla-lrm-august-2017_rev201712.pdf)> [引用日: 2021-09-22]

<sup>2</sup> Pat Riva, Patrick Le Boeuf, Maja Žumer (和中幹雄, 古川肇訳者代表) 『IFLA 図書館

- 
- 参照モデル：書誌情報の概念モデル』樹村房, 2019, 104p.
- 3 高久雅生「タスク重要：ユーザタスク指向のプラットフォーム設計と開発を目指して」『情報知識学会誌』28(5), 2019, p.363-366.
  - 4 和中幹雄「IFLA LRM の訳語をめぐる問題」『メタデータ評論』1, 2021.5, p.63.
  - 5 前掲 2, p. v.
  - 6 前掲 2, p.9.
  - 7 前掲 4, p.63-64.
  - 8 和中幹雄, 古川肇, 永田治樹訳『書誌レコードの機能要件：IFLA 書誌レコード機能要件研究グループ最終報告：IFLA 目録部会常任委員会承認』日本図書館協会, 2004, p.81-89. なおこの文献は現在は以下のサイトでオープンアクセスとなっている。  
<<https://www.ifla.org/files/assets/cataloguing/frbr/frbr-ja.pdf>> [引用日: 2021-09-22]
  - 9 国立国会図書館収集書誌部訳「典拠データの機能要件」2012.12.<  
[https://www.ifla.org/wp-content/uploads/2019/05/assets/cataloguing/frad/frad\\_2011-jp.pdf](https://www.ifla.org/wp-content/uploads/2019/05/assets/cataloguing/frad/frad_2011-jp.pdf)> [引用日: 2021-09-22]
  - 10 Functional Requirements for Subject Authority Data (FRSAD) A Conceptual Model, 2010<<https://www.ifla.org/wp-content/uploads/2019/05/assets/classification-and-indexing/functional-requirements-for-subject-authority-data/frsad-final-report.pdf>> [引用日: 2021-09-22] なお、FRSAD についても、参考文献 2 の p.104 で挙げられているように、以下の邦訳が存在するが、若干入手が困難な資料であるため、本稿ではより閲覧が容易な原文を参照した。山本昭, 水野貴子訳「主題典拠データの機能要件 概念モデル(仮訳)」『TP&D フォーラムシリーズ：整理技術・情報管理等研究論集』23, 2014.7, p.64-96.
  - 11 前掲 2, p.11-13.
  - 12 Transition Mappings, 2017<<https://www.ifla.org/wp-content/uploads/2019/05/assets/cataloguing/frbr-lrm/transitionmappings201708.pdf>> [引用日: 2021-09-22]

(いまの そうすけ 京都大学工学研究科吉田建築系図書室)

2021年10月10日受理